

## 報告

## 第7回東アジア天文学会議 7-th East-Asian Meeting on Astronomy

松尾 厚（山口県立博物館）

### 1. はじめに

「東アジアにおける天文学ネットワーク：研究・教育・普及」をテーマとした標記の会議（略称：EAMA7）が、10月8日（月）～12日（金）の日程で開催されました。この会議は本会も共催団体の一つになって、松村会長がSOCのメンバーとして参画しています。私もLOCの一人として、この会議に参加しましたので、教育・普及セッションを中心にその概要を報告します。

### 2. EAMA（イアマ）について

EAMA(East-Asian Meeting on Astronomy)は、東アジア天文台構想などの将来展望も考慮しつつ、東アジアの天文学における交流や共同、ネットワーク作りを目的として1990年に始まり、ほぼ3年に1度開催されています。今回のEAMA(EAMA7)は、世界天文年(IYA)を前に教育・普及における交流を大きなテーマの一つとして開催されました。このため4日間の開催期間のうち、1日半が教育・普及のセッションに割り当てられています。

### 3. サイエンスセッション（セッションI～IV）

今回の会議には、10か国・地域（台湾、韓国、中国、モンゴル、フィリピン、インドネシア、ベトナム、タイ、マレーシア、日本）から約140人の参加者があり、このうち海外からの参加者は約60人でした（参加者名簿による）。場所は福岡市のベイエリアにある福岡国際会議場です（図1）。



図1 メイン会場となった福岡国際会議場

目の前は博多港で、会場ロビー（5階）からは、釜山への定期航路や世界クルーズに向かう大きな船、博多湾の向こうには志賀島や玄海島が見え、とても美しい眺めです。会議は海部・組織委員会会長や土佐・日本天文学会理事長の挨拶の後、セッションに入りました。全てシングル・セッションで行われたので、会場を右往左往しなくて助かります。



図2 サイエンスセッション

セッションの前半（9日～11日午前）は天文学の研究に関する発表です（図2）。まず各国・地域の研究の現状や将来計画の概要についての発表があり（セッションI）、その後、個別の研究プロジェクト（セッションII）や

研究面での共同・ネットワーク（セッションⅢ、Ⅳ）の発表が続きました。発表件数は約50件、うち海外からの発表は約30件です。私は勤務の都合で全ての講演を聴くことはできませんでしたが、中国の活気ある発展の様子に感嘆しました。

#### 4. 教育・普及セッション 1 日目（セッションⅤ）

11日の午後からは、天文の教育普及に関するセッションに入りました（図3）。最初に海部委員長から、2009年の世界天文年についての概要と日本の取り組み状況についての報告があり、その後、8か国・地域（台湾、韓国、中国、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア、日本）の天文教育・普及活動の概要の発表へ移りました。日本の概要については当会の松村会長が報告し、天文教育普及研究会の活動を中心に、わかりよい英語で発表されました。この日の教育・普及セッションの発表は9件、うち海外からは7件でした。



図3 教育・普及セッション（1日目）

社会教育に関する発表では、韓国、台湾は、かなりの規模の施設（天文分野を持つ博物館・科学館など）がいくつも稼働している状況で、特に大規模なものは国立のようです。中国がそれに次ぎ、その他の国では、国の拠点施設（大規模とは言い難い）がいくつが存在する状況、あるいは天文研究を行っている数少ない大学で観望会などの普及活動を手がけている状況、という印象を持ちました。国

内に小規模なプラネタリウムが数か所という国も（あるいはゼロの国も）多いようです。

教育セッションに入って出席者が大幅に減少しないかと心配でしたが、会場には約70～80人ほどの参加者がいました。参加者総数が約140人といっても部分日程の参加があるので、一見したところサイエンスのセッションよりも2～3割少ない程度かな？という感じでした。

#### 5. 教育・普及セッション 2 日目（セッションⅥ）

12日は朝から場所を福岡県青少年科学館（久留米市）へ移して開催されました（図4）。会場は同科学館のプラネタリウムドーム内です。教育普及をテーマにしたEAMA7ならではの試みです。参加者は福岡市から高速道路で30～40分の距離を貸し切りバスで移動しました。この日の参加者も昨日とほぼ同数の70人弱でしたが、広いプラネタリウムドーム内ではさすがに空席が目立ちます（図5）。



図4 最終日の会場の福岡県青少年科学館

12日の発表は個別の教育普及活動に関するものです。この中では私の仕事柄、韓国に建設中の国立科学博物館の紹介が印象に残りました。この博物館は来年秋にオープン予定で、総経費4.5億ドル（うち展示に1億ドル）、延床面積45,000 m<sup>2</sup>の世界最大級の科学博物館になります。天文関係では1m反射望遠鏡（冷却 CCD）や、25mドームのプラネタリウムも設置されます。天文の研究職員も3～

5名募集（国籍問わず？）するそうです。天文台やプラネタリウムなどでの普及活動のプログラム作りに苦心しているの、ぜひ協力をお願いしたいとのことでした。昼食後にはプラネタリウムで映画（銀河鉄道の夜）の上映があり、午後の発表では杉並区立科学館の伊東昌市さん（会員）による、自作プラネタリウム番組のダイジェスト投影もありました。この日の発表は18件、うち海外からは6件でした。

教育普及セッションのまとめの時間では、松村会長が来年度の年会（第22回天文教育研究会）についての案内もしました。来夏の年会では東アジアからの参加者も期待したいと思います。最後に松村会長の終わりの挨拶があり、EAMA7は盛会のうちに閉会しました。



図5 教育・普及セッション（2日目）

## 6. ポスターセッション

福岡国際会議場にはポスター会場が設けられ、9日～11日の間、ポスター発表が行われました（図6）。発表件数は63件で、うち教育・普及関連は8件でした。私も山口博物館の80年間に渡る天文教育活動について報告しました。

## 7. 世界天文年（IYA）についての会合

11日のセッション終了後の18時30分から、IYAについての非公式な会合（自由参加）が持たれました。参加国は日本を含む9か国・地域（中国、台湾、韓国、インドネシア、

フィリピン、タイ、ベトナム、マレーシア、日本）だったと思います（モンゴルの出席者もいらしたかもしれません）。日本以外は各国1～2名の参加者で、総数は30人強でした。本会の会員もたくさん参加されていました。

内容は各国の取り組み状況の報告です。海外からの参加者は直接のIYAの担当者とは限らず、よくわからない部分もあるのですが、日本の取り組みが一番バラエティに富んでいるように思いました。他国では、「国際天文オリンピックを主催する」「特別展示を考えている」などもありましたが、「非公式協議が始まったところ」「これから組織を作る」など、準備中といった状況です。「記念スタンプ（切手?）」を作るという計画もありました。

## 8. おわりに

EAMA7での発表総数（口頭+ポスター）約140件のうち、教育普及関連の発表は35件でした。日本からの教育普及関連の発表は22件、そのうち本会会員が関係している発表は17件と、ほぼ8割を占めています。この会議への本会会員の参加者は25人でした。末尾に会議の開催要項（抄）を掲載しましたので、参考にしてください。また、会議の集録も発行されるそうなので、発表内容に関心のある方はそちらをご覧ください。



図6 ポスター会場（福岡国際会議場）

個人的には全体を通じて中国の活気に圧倒されました。次回EAMA8の開催地も中国・上海が予定されています。一方では、45cm

反射望遠鏡が国内最大の望遠鏡という国もあるなど、日本の状況を把握するのが精一杯だった筆者にとっては、東アジアの状況を知る良い機会になりました。会議前日の8日夜にはウエルカム・パーティー、10日夜には一流ホテルで豪華なディナー・パーティーが開かれ、こちらの方も十二分に楽しみました。



図7 10日夜のディナー・パーティー  
(西鉄グランドホテル)

最後になりましたが、SOC Chairの海部宣男さん(放送大)、LOC Chairの山岡均さん(九州大)、福岡県青少年科学館の皆様をはじめ、関係の方々には大変お世話になりました。深く感謝いたします。また、EAMA7に御協力いただいた本会会員の皆様にも厚くお礼申し上げます。

#### 【開催要項(抄)】

名称：第7回東アジア天文学会議  
7-th East-Asian Meeting on Astronomy  
"East Asian Network of Astronomy  
:Research, Education, and Popularization"

日時：2007年10月8日(月)～12日(金)  
会場：福岡国際会議場(福岡市、8～11日)  
福岡県青少年科学館(久留米市、12日)  
主催：第7回東アジア天文学会議日本組織委員会

主旨と内容：

日本・中国・韓国・台湾をコアとする東アジア天文学会議(EAMA)は、1990

年の中国黄山会議をスタートとし、場所を移してほぼ3年ごとに開催されてきた。この間EAMAは、特に装置開発や観測を中心に東アジアにおける天文学の実質的な協力・協力を積み上げ推進することをめざし、多くの交流と共同を組織してきた。ソウルでの第6回会議(2004年)での合意に基づき、2005年に交流支援の土台としてのEACOA(東アジア中核天文台連合：NAOJ, NCAO, KASI, ASIAA)が結成された。

第7回は2007年に日本で開催することとなり、この間の東アジアにおける本格的な共同の進展、東アジア天文台構想など将来展望の高まりをふまえ、新たな東アジア共同へのステップとすることをめざして開催される。また2009年が国際天文年(IYA)となったことを受け、教育・普及においても東アジアにおける交流の第一歩とすることを提案する。

そのためタイトルを「東アジアにおける天文学ネットワーク：研究・教育・普及」とし、EACOA参加地域以外である他のアジア地域からも、主に教育・普及における交流を念頭において参加者を招待する。

10月8日(月・祝) 夜 レセプション  
9日(火) サイエンスセッション  
10日(水) サイエンスセッション  
11日(木) サイエンス+教育・普及セッション  
12日(金) 教育・普及セッションと福岡県青少年科学館見学

松尾 厚(山口県立博物館)